日川高校図書館

図書館通信　vol. 12

こんにちは♪ 夜の日が落ちたあとと、朝の日が昇るまえが涼しく過ごしやすくなりました。虫の声も聞こえます。秋ですね。季節は確実に秋に変わりました。秋と言えば、ファッションの秋、芸術の秋、スポーツの秋、恋愛の秋、食欲の秋…。何をするにもふさわしい季節ですね。そして、忘れてはならないのが**「読書の秋」**！ 食欲の秋で食べ過ぎるとタイヘンですが、本は読みすぎてもすべて栄養になります。図書館で本を借りれば、サイフも空になりません。いいことずくめの読書の秋を満喫しましょう！秋の夜長は本とともに過ごしましょうね♪

『ウクライナ戦争日記』

Stand With Ukraine Japan　左右社編集部 編

「日記を書いた人は、特別な人々ではありません。残酷にも、いきなり怖ろしい状況下に投げ込まれてしまっただけの、あなたや私と同じ人間であるということを忘れないでください」。2月 24 日にロシアがウクライナへと攻め込みました。半年以上経った今でもまだ戦いは終わっていません。こんなにも戦(いくさ)が長引くなんて、誰が想像していたでしょうか？ この本は、いまだ戦争下にあるウクライナの普通の人々 24 人の日記をまとめた本です。この本を読むと、爆弾は野原に向かって打ち込まれているのではなく、私たちと同じような人々が暮らしを営む街に向けて撃たれているのだというあたりまえのことに気づかされます。

『嘘つきジェンガ』　辻村深月

詐欺をテーマにした３作を収録した短編集。タイトルは、ジェンガのように積み上げてしまった嘘が崩壊を予感させます。たとえば、「2020 年のロマンス詐欺」。不幸にもコロナ元年に大学生になり東京に出た耀太(ようた)は、何も始まらないキャンパスライフの孤独と、このご時世だからと決まらないバイトの不安から、地元の友だちからの「オンラインでできるバイト」の誘いに乗ってしまう。それはあきらかにヤバいバイトで、女性には六本木のＩＴ企業の社長、男性には美人の音大生を騙(かた)って、カモリストにメールを送り、感触のいい相手からお金を引き出すというものだった。耀太は心の通う相手となった主婦から虐待されていることを告白され、助けを求められるが…。ほかに、好きすぎるマンガ原作者に十年なりすました無職女性の物語など。

『あの子とQ』　万城目(まきめ) 学(まなぶ)

青春×吸血鬼！ 嵐野家の一人娘である弓子は、ごく普通の高２のＪＫ。だけれども、実際は吸血鬼なのでした！ 正真正銘のヴァンパイア一族の末裔。とはいっても、人間社会に溶け込んでいる現代の吸血鬼は数百年前の吸血鬼からはだいぶカスタムされている。太陽のもとでも歩けるし、年はとるし、子孫も残せるようになった。なにより、もはや血を吸わなくても生きていけるようになっていたのだ。ただし、そのためには「脱・吸血鬼化」の儀式を行わなければならない。吸血鬼が十七歳になること。証人による証明がなされること。この二つの条件が揃えば、儀式への参加が認められる。平穏に暮らす弓子の目のまえに何の前触れもなく現れたのが、その証人であるQだった。「俺は、お前のQだ」。Qは、誕生日までの十日間、弓子が血が吸わないかどうか監視に来たというのだ。Qは人のかたちからはほど遠い、直径 60 センチほどの、ウニのように長いトゲトゲに覆われた得体の知れぬ物体である。人間の血を吸うなんて、絶対にあり得ない！ 十日間もこんなに気味の悪いやつといっしょに生活しなくてはならないことだけがユウウツな弓子だったが、そこは万城目ワールド！ 怒濤の展開へと巻き込まれていきます！ 一滴でも人間の血を舐めてしまったら、吸血鬼の本能が目覚める。血の渇きの恐ろしさを弓子は知らなかったのでした。

『浅草ルンタッタ』　劇団ひとり

100 万部突破のデビュー作**『陸日向(かげひなた)に咲く』**、自身で映画の初監督をした次作**『青天の霹靂』**からなんと 12 年ぶりの書き下ろし！「近所の学生さんも、千鳥足の酔っ払いも、お月様もお星様も、みんなみんな、ルンタッタ！」ある雪の日、吉原の遊郭には行けないような女たちが流れてくる浅草の置屋「燕屋(つばめや)」の前に、赤ん坊が捨てられていた。かつて自らの子を亡くした遊女の千代は、周囲の反対を押し切って育てることを決める。お雪と名付けられた少女は誰からも可愛がられ、女郎たちはそれぞれの得意なことを教えた。９歳になったお雪の何よりの楽しみは、お芝居だった。世話役の信夫(のぶお)といっしょに浅草六区の芝居小屋へと通い、切符が完売のときには二人で屋根裏に忍び込んだ。日本に上陸したばかりのオペラを浅草流にアレンジした「浅草オペラ」に出会うや、お雪は夢中になった。毎晩観てきたオペラの真似をし歌って踊ってみせた。大正の浅草の賑わいと幸せな毎日は永遠に続くかのように思えた。ところが、一帯を管轄する警部補の男がお雪に手を出して千代が激昂し、返り討ちに遭う千代を救おうとしてお雪は果物包丁で彼を刺してしまう…。

『沈黙のパレード』 東野圭吾

東野圭吾の２大人気シリーズと言えば、福山雅治演じる＜ガリレオ＞シリーズと、阿部寛演じる＜加賀恭一郎＞シリーズですが（両方ともコンプリートしているというツワモノもいますよね！）、今月は前者が熱いようです！ シリーズ第９作目である今作が、大傑作**『容疑者Ｘの献身』『真夏の方程式』**に継ぐ９年ぶりの第３作として映画化されたからであり（柴咲コウ、北村一輝も再集結！）、それと連動して映画の４年前の事件であるシリーズ第８作**『禁断の魔術』**もＴＶドラマ化され、今月はガリレオ祭りといった様相を呈しているからです！「沈黙は連鎖する。それは罪か、愛か」。 今作の舞台は、年に一度の秋祭りの大がかりな仮装パレードで賑わう菊野市。菊野市の食堂「なみきや」を賄う夫婦の娘・佐織が３年前に行方不明になった。美しい娘で「なみきや」の看板娘だった。歌が上手で小学校４年から秋祭りののど自慢大会の常連で、高校を卒業すると歌手になることを真剣に目指し、デビューを間近に控えた折だった。行方不明から３年以上経って、遺体が発見された。なぜか生前彼女が訪れたこともない静岡の火事になったゴミ屋敷の焼け跡から、もうひとつの遺体とともに発見されたのだった。もうひとつの遺体はゴミ屋敷の主の婆さんで６年前に自然死していたとのことだ。その婆さんの息子の蓮沼寛一には、かつて「優奈ちゃん事件」の被告になりながら無罪となった過去があった。23年前、当時 12 歳だった優奈ちゃんが行方不明となった。状況証拠があがっても蓮沼は犯行を完全否認し、黙秘を貫いた。蓮沼は無罪を勝ち取ったのだ。その蓮沼が、犯人なのではないか…。

『禁断の魔術』　東野圭吾

「ここに登場する湯川学は『シリーズ最高のガリレオ』だと断言しておきます」（東野圭吾）。湯川が殺人を？「自業自得だ。教え子に正しく科学を教えてやれなかったことに対する罰だ」。レールガン（電磁投射砲。電気で発射する超高速・高威力の銃）の物語です。「科学を味方につけた者は無敵だ。どんな夢さえも叶う」。高校のサークル・物理研究会の危機を救ってくれた湯川に憧れて帝都大学に入学した伸吾は、唯一の身寄りだった姉が殺害されたために、大学を中退し町工場で働くことになった。彼は姉の仇を討つために、湯川とともに作った実験装置・レールガンを武器として使おうとしていた。それを知った湯川は「教え子」の道を誤らせた責任を取ろうとする…。「科学技術はよいことばかりではない。使い方を間違えれば、禁断の魔術となる」。科学のすばらしさを確信する湯川の決断。新木優子がバディに！

『四畳半タイムマシンブルース』　森見登美彦　上田 誠 原案

森見作品の理想的なアニメ化！「ここに断言する。いまだかつて有意義な夏を過ごしたことがない、と」。夏は人間的成長の季節と言われるが、過酷な京都の夏、四畳半はタクラマカン砂漠のごとき灼熱地獄と化し、綿密な計画、早寝早起き、肉体的鍛錬、学問への精進はことごとく挫折してきた。しかし、今年はちがう。なぜなら文明の利器クーラーがあるからである…はずであったが、「もし彼と出会わなければ、きっと私の魂はもっと清らかであったろう」悪友・小津がコーラをクーラーのリモコンにこぼして壊してしまい、台無しにしてしまったのであった。意気消沈する私だったが、ひょんなことから起死回生の打開策が見つかる。未来からやってきた、それにしてはモッサリとした男が、タイムマシンで現れたのだ。タイムマシンで昨日に行き、壊れる前のリモコンを持ってくれば、クーラーを再び起動できるのではないか。名案だと思われたが、過去を変えると、未来が変わってしまう。小さな改変のせいで全宇宙が消滅する可能性もあることに気づいて、大騒ぎとなる…。レトロな夏！

☆『６カ国転校生 ナージャの発見』　キリーロバ・ナージャ

「環境が変わると、ガラッと変わるものは？」答えは「ふつう」。小１から中３まで毎年違う国、計６カ国の学校に通ったナージャさんがそれぞれの違いをまとめた本。世界の教室はこんなにも違うのです！ たとえば、席の並び方一つとっても、イギリスでは図書館のような６人掛けのテーブルに座り、フランスでは会議をするときのようにみんなの机で大きな円を描くように並んで、そのなかに先生が入って授業をするのです。ランチは多様性を重んじる英米はお弁当で、ロシアは朝食と昼食の２回の給食、フランスでは昼休みに家に帰って家族と食べるのだそうです。それぞれのルールの違いは、その学校が何をいちばん重要だと考えているかによって生まれます。イギリスで座席がグループで一つになっているのは、勉強がグループワークであるという認識から。「わからないことがあるから、仲間がいる」ことを教えようとしているのです。フランスで満点は 20 点満点だけれど、めったに 16 点以上はとれないようになっているそう。人生に完璧はなかなかない。そう簡単に素晴らしいことなど起きないし、常に努力が必要だと教えてくれるのです。

◎藤原和博さん（「よのなか科」の特別授業を１年生に４回してくださります）の本のコーナーを図書館に設けました！ 目からウロコの体験をしたキミはぜひ！